

歴史的街並の中での都市計画

＝京都, その創造的都市建設の歴史と展望＝

三輪泰司

工業化（インダストリアライゼーション）、都市化（アーバナイゼーション）を基調に、わが国の地域空間は未曾有の変貌を経験し、いまなお進行している。その中で失われていくものが地方的な個性であり、造られていくのは標準化した市街地景観である。

自然環境とエネルギー資源の危機という衝撃を契機に、社会的な制御システムの自然発生的作動とでもいうのか、いろんな分野から湧き上ってきた反省、見直し、ディスカバー等々、さまざまな形で“何か..”が求められ、“意識変換..”が云々されている。

歴史的遺産を豊富にもつ日本文化の中心——現に、140万の市民が現代を生きているわが国最大の内陸都市「京都」が都市開発の分野からも“何か..”を求める対象と考えられるのも判るような気がする。

このような漠然とした問題意識を解明し、それに体系的にこたえるには、数巻の書が必要であろうし、期待にそうだけのものを京都のまちはもっているであろうが、ここでは、2つの視点から、ほんの概括的な素材を提供してみたい。

そのひとつは、京都のまちづくりにみる、垂直的——時間の関数として歴史性から、と水平的——同時代の横断面での地方性からの視点と、もうひとつは、行政的手法としての都市計画と人間の社会的な生活——くらしのしくみとの関係の視点である。

歴史性の今日的意義

都市は自由な交歓と批判の場として、創造的な活力の源泉でもある。京都の町には多彩な産業や静かな街並やそれらを背景にくりひろげられるさまざまな行事に見られるように、深く豊かな人間の創造的な智恵が1,000余年にわたる歴史の中で街のすみずみにきざみ込まれている。

将来へ向って都市をつくっていく仕事、計画の仕事というものは丁度トンネル掘削のようなものである。未来は土で詰っているみたいなものでしかと判らない。われわれは、天智天皇9年（670年）の火災による再建か推古時代か、結論はまだ判らないにしろ、とにかく1,300年前の法隆寺をみる事ができるし、平安後期12世紀初頭の鳥羽離宮の姿を描くことはできる。しかし、われわれは1,000年後の町や建築を確実に予測することができるだろうか。

トンネルを正確に掘り進むには、土の中に測点を設けるわけにいかないから、背後に測点を設け、絶えず後を向いて測量しながら前へ掘進していくしかない。

歴史とはこの背後の測点である。京都はこの測点を実に豊富にもっている。われわれにとって歴史的遺産は前進するために必要なのである。

京都の町は、1,000余年の間、同じ性格・機能で同じ姿・形でありつづけたわけではない。不死鳥のまち京都、平安京は唐の長安の4分の1の規模とはいえ、東西約4.7km、南北約5.7kmの拡がりに幅80m余、長さ4km以上の朱雀大路といった人間的スケールを超えた古代アジア的政治都市であった。この中国の都城制を範とした形は、律令制の崩壊と右京一帯が低湿地であったという自然条件によって崩れ、文治元年（1185年）鎌倉幕府の創立によって政治都市としての性格も失った。

平安京は没落したがまちは消滅しなかった。荘園領主は都に住み諸国から物資が集中し、彼らの生活を支える職人、商人など民衆がいた。うちつづく内乱のなかで民衆は宗教を育て、宗教都市となっていく。応仁・文明の乱（1467～1477年）の焦土の中から民衆は町々に町組組織をつくり復興をはかる。そのひとつのクライマックスが祇園祭の復活（1500年）であったこともよく知られているところである。新しい町衆文化の推進力になった経済基盤は前時代から受継いだ都市産業、とりわけ西陣織であり、それと結びついた商業である。この時期には、以前の右京、左京に代って、上京、下京に町組がつくられ、各々工業と商業を機能分担する町の構造ができてきている。戦国の中から現われた織豊政権は、町の豪商をとり込み、町組を崩し、支配権を奮うとともに、お土居、短冊型の町割、寺町など、大々的な都市改造を行ない、伏見には城をつくって軍事都市化をすすめた。織豊政権に代った徳川幕府は、上京、下京の中間点にあたる二条に城と所司代をおき、支配権の強化をおこたらなかったが、この時期、整備された宗門制度によって各本山寺院をはじめ全国からの財を吸収して寺院建築がつくられるなど文化的高揚が今日にまで多くの財産を遺してくれている。

江戸時代後期には、地方で産業が興り、西陣は衰退したが、前代からの歴史的文物とともに文化的には洗練の度が深まり、観光的価値は高まった。内部の生産的活力が弱まった時に外から観光的文化が評価されるという皮肉な歴史的教訓であろう。

明治維新はこうした沈滞の京都には決定的な打撃であった。1,000年にわたる“王城..”の地位を失った。市民は狼狽と絶望から自ら営々と培ってきた町衆の力を自覚し、京都府大参事榎村正直らの指導

の下に、政治・経済・教育・風俗にいたる大改革にとりくんだ。舎密局、織殿などの産業施設、博覧会、女紅場などの文化施設や研修制度、町組組織の上につくられた小学校学区制など欧米先進技術の導入を独創的なシステムの上にうけ入れて新しい時代に積極的に対応していった。明治15年(1882年)北垣国道知事によって実施された琵琶湖疎水は、輸送、動力、用水のほか、市内の防火、河川の浄化などの機能をもつ、地域総合開発の先駆ともいべき事業で、京都の近代化に決定的な役割をはたした。その水力発電によって西陣など市内工場の電化がすすみ、公害と景観破壊を防いでいる。東山山麓の景観ととけこんだ水路橋の造形美は今日のわれわれにひとつの見識を示している。

新しい地域主義

今日、生産力の著しい発達を背景に、物的環境の全国的な平準化が急速にすすんだ。公共投資がこれに迫車をかけ、街の表情はどこもかしこも同じになってきた。

所得と税制は、国民生活の平準化もすすめている。人々は、平準化の中から“ちがいを”求める。地域計画からいえば、この欲求からも新しい地域主義が期待される。

京都の街並は、まだ地域ごとの個性をとどめている。賀茂の社家町の妻かざりのある平家建住宅群、中京の商家のむしこ格子、祇園新橋の細い格子とすだれのやわらかい曲線、これらが、ただの形骸ではなく、そこで営まれている生活とともに生きている。大事なことは、生かすための智恵と努力が払われているということである。

通称祇園新橋、元吉町と末吉町の一部など1.5ha(98軒)の地区が特別保全修景地区指定をうけたのは昭和49年7月1日である。

町のほぼ中央でいわゆるバービルの計画を知って祇園はじまって以来の住民運動が起って丁度1年であった。この祇園発祥の地新橋通りの両側は、2階建、ベンガラ格子に駒寄せ、長いすだれという町並が40軒、軒をつらねてバー街化がはげしい界わいで数100年の伝統をのこした情緒に包まれている。表通りのお茶屋、料理屋、路地には芸妓や板前が住み、髪結い、大工、表具屋と町に必要なものが一通りそろってうまく住みわけている。ひとつの共同体である。お茶屋は今では特定少数の人の楽しみ場所ではなくなっている。昼間から忙しい。住宅地の奥さん方に芸妓が踊りやお茶を教える。祇園では夜はおそいが朝も早い。格子をぞうきんがけし、床には花を活けて——という生活規範が今も守られている。だから昼間の需要にもちゃんと応じられる。

私たちは、この町で生活し商売していきたいのだ。売る気はないのだ。商業地域で400%なら、うまくやったら5、6階建のビルもできる。しかし、舞妓が置屋からお茶屋へいくのに護衛をつけねばならないようになるのはごめんだ。町にいる大工さんは、クーラーのお尻をかくす格子ひとつにも祇園の木割りを守って気をつかっていた。僅か6日間で3,935名の署名をあつめ、市民と全国からの支援をうけて市長に陳情し、市の都市計画局もこれに積極的にこたえて調査し、説明会も開き、美観風致審議会も住民の要請を支持した。

指定を記念して、住民は、元禄風俗で町をいりどり、お祝いをした。正確に時代考証して結える「無形文化財級」の髪結いさんが2人もいるのだと町の人は自慢している。

ここにしたたかな住民の地域に根ざした、「都市計画」がある。

行政計画と町づくり

都市計画に関する行政法は、おそらく、わが国の法制の中でも体系的に最も整備されているもののひとつであろう。が、都市計画の基本理念でうたわれている「……健康で文化的な都市生活および機能的な都市活動を確保すべきこと、ならびにこのためには適正な制限のもとに土地の合理的な利用が図られるべきこと……」(法第2条)を現実の生きている歴史的街並の中で貫徹していくのは祇園の例のようなあるいは京都の起死回生のために奔走した明治の市民たちのように、行政も専門家も一緒になって智恵をふりしぼる努力が必要である。

準防火地域の中でどうしてベンガラ格子の街並を保持できるか。これは都市計画や建築行政だけの問題ではない。消防との協議も必要であろうし、何より自覚した住民の社会的連帯がなければならない。

町づくりには完成図はない。しかし、その時代、その時点での目標としての構想は必要である。全体の構想、地区ごとの構想が必要である。大きくは、土地利用、個々には市街地開発事業、都市施設、そして建築によって実現されていく。街灯やガードフェンスやバス停の標識や看板によって実現されていく。

それぞれによって、あるものは明治初期と桃山・寛永期の庭園造形が“測点。”になってその見通し線上に新しいデザインが描かれるであろうし、別のケースではまた違ったモチーフが求められるだろう。

たしかなことは、歴史が教えるように街並に何かつけ加えることは、その瞬間、所有権のいかんにかかわらず社会的ストックに転化しているということである。そして“歴史的街並。”の構成要素となる。京都は国土の中での地理的条件と市民の生活に根ざした努力によって常に時代の中で新たな役割をもって存在し続けてきた。積分でみたならそのエネルギーの量は莫大なるものであろう。しかしどの町でも村でもそれぞれにかけがえのない歴史をもっている。町づくりは計量的に捕捉し、行政的都市計画手法で可能な範囲とそれができない部分がある。むしろその両者の結合を追求するところに創造的な都市計画があるのではないか。清水焼団地、やファッションタウン(繊維産業団地)などにそのような都市建設のステップを見ることができる。紙数の関係で詳しく述べられないが、このような実例を確認し、さらに市民的エネルギーの爆発に創造的方向を示すことも歴史的都市の計画のこれからの課題である。

その方法においても現代の西欧的文明観に由来するといわれる諸問題に対する非西欧的アプローチへの期待の中で歴史的都市の計画のはたすべき役割もわれわれは考えていかねばならない。

最も日本のなものが最も国際性もちうる、そういう観点から京都の将来計画が構想されねばならない時であろう。

(地域計画・建築研究所所長)